

近世大坂商家の婚礼

——雑喉場魚問屋・神崎屋平九郎家を事例として——

森本 幾子

(なにわ・大阪文化遺産学研究
センター主任研究員)

はじめに

社団法人・大阪市中央卸売市場本場市場協会資料室には、近世近代にかけて、大坂雑喉場で魚問屋を営んでいた神崎屋平九郎家の文書『鷺池家文書』が保管されている。この『鷺池家文書』は、二〇〇点余が残存し、その一部はすでに資料集として刊行され、研究成果も報告されている¹⁾。

当センター研究員酒井亮介氏が同室室長として勤務している関係から、幸いなことに当センターにて資料を調査し、なかでも商家の冠婚葬祭に関わる資料については一部写真撮影を終了し、現在調査・研究を進めている。二〇〇点余の資料のうち、近世のものは二〇点余あり、そのうち十四点は、婚礼や法要をはじめ、誕生した子どもの初着・初節句・髪置・袴着祝や隠居の還暦祝など人生の通過儀礼に関する記録である。これらの資料は、儀礼の際に取り交わされる贈答品や祝儀銀が詳細に記され、親類や地域社会とのつながりの濃さがひしひしと伝わってくる。

近世大坂商家の法要記録をまとめた数少ない成果として、当センター研究員近江晴子氏校訂の『助松屋文書』²⁾があり、葬式や法事などの儀礼にまつわる「モノ」の文化、食文化、贈答文化など近世大坂商家の生活文化を知る上で欠かすことのできない資料となっている。今後、『鷺池家文書』の調査が進めば、靴の干鰯問屋助松屋と雑喉場の生魚問屋神崎屋の法要を

比較検討することもできるだろう。

近世大坂の商家については、これまでも商品流通や経営分析を中心とした研究が数多く蓄積されている。近世の大坂商人が発展し、諸国に信用を得るためには、老舗であることやその経営手腕が問われるが、その一方で、地域や親類との結びつきが大事にされる。冠婚葬祭や年中行事の場で再確認される地縁・血縁関係は、おそらく経営と表裏の関係で重要なものと認識されていたのではないか。

このことを検討する上で、近世京都の葉種問屋岡田家の祝儀・不祝儀文書を駆使して商家における贈答儀礼や通過儀礼の意義を考察した森田登代子氏の研究は注目される。森田氏は、奉公人を含む親類縁者相互の人間関係に贈答互酬の習俗が重要な作用を及ぼしていたこと、通過儀礼を通じた近世の家族のあり方、死生観、子供の養育への想いなど家族生活の様相について明らかにしている。森田氏も指摘されているように、農村地域に比較して都市の庶民階層の通過儀礼や贈答儀礼についてはあまり考察されているとは言えない。

そこで、近世大坂における贈答儀礼や通過儀礼を明らかにするために、『鷺池家文書』のうち、今回は「文政拾年三月吉日 式番諸事覚日記」の記録から四代目神崎屋平九郎の娘おていと富田屋久兵衛の婚礼の模様を紹介し、近世大坂商家の婚礼の特徴について考えてみたい。『鷺池家文書』のうち近世の文書は、法要関係記録が圧倒的に多く、婚礼の記録は数件のみである。毎年毎月のように年忌が営まれることは、商家として経営が維持され、家が存続していることの証であるので、商家にとっては重要な行事として認識されていた。一方、婚礼は、一生に一度の儀礼であるから法要に比べて当然記録は少なくなり、資料として残存する可能性も低くなる。したがって、おていの婚礼記録は、近世大坂商家の婚礼をあらゆる分野から分析することが可能な数少ない資料として価値の高いものと言える。

さて、周知のように雑喉場は、主に西日本から運ばれる生魚を扱う市場として全国の商人が集まり、その取引の様子は『摂津名所図会』『浪華百景』『浪花名所図会』『海川諸魚掌中市鑒』『浪華の賑ひ』『花の下影』など

近世後期から幕末期の図版画に活き活きと描かれている。明和九年（一七七九）には問屋仲間株が公許され、問屋株持ち八十四軒が百軒堀の東浜雑喉場町に三十七軒、西浜江之子島町に二十五軒が集中し魚屋町を形成していた⁽⁴⁾。また、近世初期に大阪天満宮の御旅所が後の雑喉場の地に設けられたことによって、雑喉場は大坂天満宮の氏地となった。そのため、雑喉場商人たちは天満宮の氏子として、天神祭に「鯛」や「鍾馗」の御迎人形を船上に飾り、船渡御船列をお迎えるために堂島川を遡り、天神祭を支えていたのである⁽⁵⁾。

この雑喉場にあつて、神崎屋平九郎家（明治期以降は鷺池平九郎家）は、安永元年（一七七二）より「魚問屋神崎屋平九郎」として資料上初めて登場し、慶応四年（一八六八）には雑喉場生魚問屋仲間年行司を勤めるほどの成長を遂げた⁽⁶⁾。『資料大阪水産物流通史』（三一書房、一九七一年）の雑喉場魚問屋名前には、安永元年には「江之子島新宮屋権兵衛借家 神崎屋平九郎」、天保十三年（一八四二）には「雑喉場町 神崎屋平九郎」との記載が確認され、居所とともに借家から家持になったことが分かる。さらに、文政十年（一八二七）年の「文政十年四月嫁入二付二階普請」の記載や「明治五年正月吉日 貸家賃扣帳」（作成者 鷺池平九郎）が残存していることから考えて、近世後期から明治初期にはすでに借家人を抱えた家持として存在していたことが明らかである。『諸国客方控』『諸国客方帳』の取引先の多さからみても、神崎屋平九郎家は、近世後期から幕末期にかけて大きく発展したものと考えられる。その後、明治元年（一八六八）、同四年（一八七一）にも生魚問屋年行司を継続し、同六年（一八七三）には西大組第五区長、同十七年（一八八四）には、問屋組合仲間総代、同二十三年（一八九〇）には雑喉場魚市場総代に就任するなど、近世から近代の雑喉場において要となる商家であった⁽⁷⁾。

四代目平九郎の娘おていの婚礼は、ちょうど神崎屋平九郎家が雑喉場の問屋として成長を遂げる時期にあたり、このことがおていの婚礼にどのように影響してくるのかも大変興味深いところである。以下、婚礼の流れに沿ってそれぞれの儀礼について検討したい。特に断りのない限り『鷺池家文書』のうち「文政拾年三月吉日 忒番諸事覚日記」の記載をもとに記述

する。

一・近世大坂商家の婚礼

① 四代目平九郎と娘おてい

おていの婚礼をみる前に、『大阪雑喉場魚問屋史料』掲載解題の系図を参照しながら、まず、四代目神崎屋平九郎と娘おていの関係について紹介しておこう。婚礼の記録では、おていの父親は四代目平九郎、母親は、す賀が務めている。

四代目平九郎（安永四年（一七七五）―天保五年（一八三四））は、寛政十年（一七九八）に、妻いと（黒屋喜兵衛娘）に先立たれた後、後妻として、つる（薩摩屋伊兵衛娘）を迎えるが、彼女も文化九年（一八一二）八月に亡くなってしまふ。その後も四代目は、後妻として文化九年八月（一八一二）に、ざん（升屋差兵衛娘）を、同十年（一八一三）十二月に、八十女改メつる（菱屋源兵衛娘）を、同十一年（一八一四）に、ざん（天王寺屋作兵衛娘のち離縁）を、同十二年（一八一五）に、す賀（大和屋善兵衛娘）をそれぞれ迎えることとなった。

四代目平九郎は、初めの妻いとの間に、息子久兵衛（改メ重蔵）と娘きたを授かったが、きたは、文化十二年（一八一五）に亡くなってしまった。今回登場するおていは、文化元年（一八〇四）に四代目と後妻つるとの間に生まれた子であったが、つるは、おていの嫁ぐ十五年前、おていが八歳の文化九年（一八一二）年にすでに亡くなっていたため、す賀が代わりに育てたのであろう。す賀にも、文化十三年（一八一六）、四代目との間に、娘くにをもうけていたが、くにも文政二年（一八一九）にわずか四歳で夭折してしまった。

平九郎に先立って亡くなった後妻つるには、おていの他に息子平八郎と娘えちがいたが、平八郎は文化八年（一八一二）七歳で夭折、えちは薩摩屋伊兵衛へ嫁いだ。後にえちの子は、六代目平九郎として嫁ぎ先の薩摩屋から神崎屋へ養子として迎えられることとなる。

四代目平九郎は、次々と後妻を迎え、生まれた娘を親戚筋の商家へ嫁が

せ、そこで誕生した男子を養子として家に入れることに尽力している。後妻を迎えるのは、「家」の存続を図るためであったが、六人の子のうち三人を幼くして亡くした四代目にとって、残された久兵衛（改メ重蔵）、おてい、えちは、「家」存続のための切り札であると同時に、可愛いわが子であったにちがいない。

今回花嫁として登場するおていは、二十三歳で嫁ぎ、結婚後三年目の文政十三年（一八三〇）、二十六歳の時に夫富田屋久兵衛との間に長男辰三郎をもうけるが、婚礼からわずか十三年後の天保十一年（一八四〇）、三十七歳の若さで生涯を閉じる。

都市やその周辺地域における商家の女性が家のために活躍していた姿は近年の研究によって明らかになりつつある⁸⁾。しかし、おていがどのような女性であったかを具体的に知ることでできる資料は残念ながら残されていないし、商家の妻として主体的に何かをしたという記録もない。ここで検討するのは、婚礼についての淡々とした記録類ではあるが、三十七年間の生涯のうち彼女にとっては一生に一度の婚礼であったこと、そして規模の差はあるにせよ、このような大坂商家の女性が数知れず存在していたであろうことを考えると、人の一生の重みを感じられる貴重な資料として認識される。

② 結納

文政十年（一八二七）、三久橋南詰河内屋彦兵衛が仲人となって、おていは、富田屋久兵衛へ嫁ぐこととなり、同年三月十三日には、結納の儀が執り行われた。今のところ、嫁ぎ先の富田屋久兵衛がどのような商家であったのか分からない。雑喉場の問屋にも富田屋の名前がないので、他業種の商家である可能性が高い。ただ、神崎屋平九郎家は、別家が五軒（神崎屋万蔵・同両蔵・同又蔵・同治兵衛・同定七）、手代三人、下人三人、下女四人、丁稚三人がおり、一方、富田屋久兵衛家は別家一軒（富田屋藤助・同子息藤次郎）しか記載がないが、下人・下女を七人抱えていることなどから判断すると、別家の数の差はあるにせよ、ほぼ同格の商家であったと考えられる。

「おてい入家」の項目をみると、結納の品として四代目神崎屋平九郎（以下四代目平九郎）から娘婿の富田屋久兵衛（以下婿久兵衛）へ、「絹布料 金五両」「熨斗」「昆布 二拾本」「鯉節 一連」「御酒 一荷」「角樽也酒」が贈られた。「絹布料 金五両」は嫁の持参金として納められたものであろう。これら結納品は釣台に載せ、夜五ツ時頃（現在の午後八時頃）、仲人一人、および宰領一人と供廻り八人によって富田屋へ運ばれた。その後、作り身・濱焼・吸物ほか五品の献立が出され、結納の儀は終了した。

③ 出立の祝いと「嫁入到来物」

結納が済み、おていの嫁入りに先立って、まず、別家・家内・出入方から祝儀銀が贈られた。「別家家内出入方祝儀銀」の項目をみると、「別家家内」は、別家の神崎屋万蔵・同両蔵・同又蔵・同治兵衛・同定七からは銀一両、その妻おかね・おかる・おまつ・お甚・お止からは銀三匁、その他出入方の女性四人からは銀三匁、手代の田助・嘉助・九兵衛三人、下人の弥助・徳蔵・和助三人、下女いと・よし・こと三人からも銀三匁がそれぞれ贈られている⁹⁾。「客方」として分類されている親類衆の祝儀銀の金額に関する記載はないが、何らかの祝儀銀が渡されているものと思われる。後家竹・きさからは銀二匁、別家の忤や子ども四人からは銀一匁となっている。その他町内からも祝儀銀が渡されている。特別に祝儀銀が贈られるのは、神崎屋平九郎家と日常的につながるの深い人たちであることの証である。

親類・縁者からの祝いの品々や銀子が揃ったところで神崎屋本家へ親類中が寄り合い、小豆飯を食べ、おていの嫁入りを共に祝った。葬礼や法事以外に祝儀儀礼においても、親類縁者との結びつきの基盤は、このような「共食」であることが指摘されている¹⁰⁾。

続いて「嫁入到来物」について検討しよう。「嫁入到来物」の項目には、六〇人余の関係者からの祝いの品々が詳細に記されている。ここに掲載されている者すべてが神崎屋とどのような関係にあったのかは、今のところ不明であるが、判明する贈り主とその到来物についてみてみたい。前

述の「別家家内出入方祝儀銀」の項目では記載のなかった人たちも登場している、その点に留意してみよう。

まず、別家衆とその妻からは、雨傘・日傘・下駄・草履などの実用品とともに銀一両・銀一が贈られている。つづいて親類衆をみると、親類惣代の薩摩屋伊兵衛からは金一両、大和屋善兵衛・長浜屋幸輔・灘屋利三郎からは金五百疋、沢田源吾からは繰綿と銀一、大嶋屋久兵衛からは、金貳百疋（鉄地扇式本添）がそれぞれ贈られている。親類衆すべてがどの町でどのような業種の商人であつたかは分からないが、親類惣代の薩摩屋伊兵衛は、四代目平九郎の後妻で、おていの生母のおつるの実家である。沢田源吾は、四代目平九郎の弟で沢田家に養子に出た人物である。また、大和屋善兵衛は、明治初期の記録によれば雑喉場町に住む神崎屋平九郎家の借家人であつたことが分かっている^①。

次に、仲人の河内屋彦兵衛からは、酒印紙・鯉節一箱拾本入が贈られている。印紙は、婚礼時よりもむしろ法要時に多く、『鷺池家文書』のうち「天保五年二月吉日 貳番年忌葬式覚」をみると、到来物として、饅頭印紙・酒切手・麴印紙などが確認でき、品物よりも印紙や切手が多いのが特徴である。これは、商品流通が発達した近世後期の大坂や京都など商品需要の多い近世都市ならではの贈答の形態であると考えられる。

呉服問屋小橋屋の手代重助からは、藍貴羅紗・御所袋沓ツ、小橋屋からは松魚拾本箱入・綾の縫入半えり式ツ・祝儀銀一、そして、同じ呉服問屋の嶋内大丸からは、鯉節十入一箱・銀一がそれぞれ贈られている。特に小橋屋はおていの嫁入衣裳を誂えており、神崎屋との関係が深まっていたと思われる。小橋屋や大丸は全国でも有数の呉服の太店である。

神崎屋平九郎家の檀那寺と思われる浄徳寺やその他起誓寺、教王寺からは、奉書・小杉三束・吉野小杉原五帖のような高級紙が、また町内会所からは、銀扇二本がそれぞれ贈られた。

神崎屋と同じ雑喉場町の間屋からの贈り物についてみると、大弥三（大和屋弥三右衛門）からは真綿百目・銀沓、文久期には雑喉場で年行司をつとめた尼傳（尼崎屋傳兵衛）と蛇八（蛇草屋八右衛門・安永元年には、「江之子島佃屋源兵衛支配ノ借家」と記されている）からは、白紬一反・

銀一、雑喉場町の間屋松藤（松屋藤兵衛）とはり久（播磨屋九（久）兵衛・『難波雀』には、船板屋として「江の小嶋 播磨屋九兵衛」と記載があるが同一人物かどうか不明）からは、吉野紙式束・金赤水引二百抱がそれぞれ贈られている。

大工よも・屋根や彦之介からは、吉野小杉原五帖・緋鹿子鬘■が贈られている。大工や屋根屋は、おていの婚礼荷物を嫁ぎ先へ運ぶ人足としても活躍していた。その他神崎屋との関係が不明な贈り主からの到来物は以下のとおりである。

金百疋（銀屋太郎兵衛）、南（鐙）三片（薩摩屋伊右衛門）、南（鐙）沓片（竹屋勘兵衛）、唐更紗風呂敷地・三匁入ル（木屋次兵衛）、草履一足浅黄天鷲絨縁（紅屋次兵衛）、紅一疋値段六拾匁位のもの・祝儀両一入ル（松利）、鯉拾本入一箱（天清ほか）、銀の根巻・扇子箱入式本（油屋・薩摩屋喜八）、杉原百枚・金赤水引百抱・銀一（寄進所新助）、菓子一箱（たか）、小杉沓束（小松ほか）、鯉節一箱（新宮屋半之介）、虎（屋）饅頭 百折入（川口屋）、小杉三束（あら徳）、小杉二束（八百佐）、小杉二束（あら清）、金巾もめん・沓両・向裏（はり清・大とも伊兵衛ほか）、鯉節拾本沓箱入ル（紙さ）

到来物の全体的な特徴をみると、（１）祝儀銀のみ（２）草履などの実用品（３）吉野紙・小杉・扇子・金赤水引など婚礼の象徴的な品（４）鯉・鯉節・虎屋饅頭など祝いの魚や菓子（５）実用品や象徴的な品と祝儀銀のセット、にそれぞれ分類できよう。おていの婚礼の到来物は主として実用品が多いことが指摘できる。別家衆を筆頭に親類衆や仲人、呉服問屋、さらに寺、町内会所、雑喉場の間屋、出入の大工など地域の人たちから祝いの品が贈られ、特に近しい間柄の人からは祝儀銀が添えられていることが特徴である。

④荷物目録と「入目録」―おていの花嫁道具―

文政十年四月八日夜、仲人河内屋彦兵衛は、おていの嫁入りに先立って供一人を連れ、神崎屋から荷物目録とともに富田屋へ入った。この時河内屋には、膳付沓朱、供には両一がそれぞれ渡された。宰領として萬兵衛と

その供一人が荷物運搬の管理を引受け、祝儀百疋と膳付兩一、兩一がそれぞれに渡されている。

荷物目録は、「琴 壺面」「衣桁 壺架」「箆筥 五棹」「塗長持 三棹」「本地長持 壺棹」外に「櫛箆筥 壺棹」「手元箆筥 壺棹」「葛巻 壺荷」である。これらを富田屋へ運ぶため、総数五十四人も人足が動員されている。しかも彼らは、神崎屋平九郎本家の手代や下人、別家衆の身内の者、町内の者、大工・左官・屋根屋、親類衆の身内の者、廣教寺の者であり、婚礼時にわざわざ雇われた者ではなく、日常的に付き合ひの深い親類・縁者から出された男衆であった。

おもしろいのは、夜に荷物を遣わすため、明り取りのための提灯を借りているが、祝い事のためであろうか、「三匁ツ、拾五張」のところを、「七拾（張）にて三百匁ニ致させ」とあるように、本来ならば提灯百張で三百匁のところを、損を承知で七十張で三百匁として借りている。また、看板（鼎紋）も一つにつき四十八匁で、「源助口入にて借ル」とある。このように、婚礼や葬式など儀礼に必要な道具を貸すことを商売とする者が存在しており、彼らの渡世にとって町内や近所の商家の儀礼は欠かせないものであったと思われる。

次に、おていの嫁入道具についてみてみよう。表は、「入目録」に記載されているおていの嫁入衣裳・道具類である。圧倒的に多いのは着物類であって、裃襦三、小袖四十一、袷十三、単物十三、夏物二十九、繻絆十七、汗取二、胴着三、合羽一、浴衣二、手拭二、前だれ三、裾除四、湯巻十二、足袋十一、帯二十五、常着十六、帛十四となっている。その他夜着類と道具類、本などがあり、すべて合わせると総数二百六十三点にも及ぶ。

衣裳についてみると、裃襦は、裏が緋紋縮緬で金糸がほどこされ、若松・亀など嫁入りを象徴するめでたい絵柄である。裃襦は、武家の女性の礼服であったが、神崎屋のような成長を遂げた商家では婚礼の衣裳として使用されていたことが分かる。さらに、『守貞謾稿』巻之十六「女服」の項では、御殿女中の衣服として「帯、錦鈍子の類あるひは黒繻子に繻模様もあり。長け丈なり。幅、市中女帯よりいささか短し。褂の下に用ふ帯は

幅五、六寸、黒繻子を専らとす。」とあり、御殿女中が用いる黒繻子について述べているが、おていの帯の部にも「黒唐繻子 友糸鳥の縫」「黒繻子 白より糸梅縫」がみられる。また、『守貞謾稿』には「・・・今世、三都とも礼晴には縮緬を専らとす。けだし近世、三都ともに縮緬に種々あり。御召縮緬を専らとす。無地紋付・裾（模）様・小紋染・縞ともにこれを専用す。この御召は常の縮緬の精製上品を云ふなり。この品ありて後、常の縮緬を衣服にする者を稀とす。」との記載がある。守貞は、縮緬の中でも精製が上品なものは御召縮緬であると言っているが、おていの嫁入衣裳のなかには、この高級な御召の小袖「御召茶紋縮緬」「御召仙斎縮緬」が二着ほどみられる。前述したように、これらはすべて小橋屋や三井越後屋などの大店の呉服店で誂えたものであった。道具類についても、鼈甲櫛・鼈甲筭・鼈甲簪や象牙櫛など高価な小間物がみられる。その他の道具類を合わせて検討すると、おていは、嫁ぎ先で自分が使用する身の回り品すべてを実家で揃えてもらって富田屋へ嫁いだことが分かる。

その他娯楽に関するものでは、三味線・双六などがある。三味線は、『女子用往来』によれば、「その音淫乱にして楽器に入らず、遊女のわざとなれり。ゆめゆめ引き習ひ給ふべからず」と記されているが、実際の商家の女性に必要なものとされていたのであろう。また、双六は、当時女性のよい娯楽とされていた。さらに、森田氏によれば、京都の岡田家の遺物進上や祝事諸記録には女性の喫煙の習癖がみられ、煙草を嗜むことは当時の商家の女主人の風格を象徴するものとみなされていたという。

さらに注目されるのは、『女大学』一冊、『百人一首』一冊が持たされていることであり、女性としての教養が要求されていた証である。その他『糸のしらべ』二冊入一箱がある。『糸のしらべ』は、地歌の詞章の集大成であり、心斎橋筋順慶町柏原屋与一が刊行し、文政一十三年（一八三〇）に至るまで増補改訂が重ねられ、所収曲数が増えるなど需要が大きかった。三味線と合わせて商家では地歌が好んで唄われていたことが想像できる。

さらなる検討を要するが、おていの嫁入り衣裳はほとんどが絹織物であり、四代目平九郎は、娘に本来ならば武家の娘が身につけるような衣裳ま

入目録

浅黄縹子	裋襦	金糸若松のぬい 緋紋縮緬裏
廣東織	裋襦	緋縮緬裏 金糸水に亀のぬい
□(華カ)色地織物	裋襦	緋縮緬裏
白輪子	振小袖	通り裏
白輪子	振小袖	引返し
白紋綾	振小袖	金糸竹のぬい 江戸妻
緋縮緬	振小袖	金糸樺のぬい 太夫妻
緋縮緬	振小袖	金糸老松の縫
藍鹿の子	振小袖	裏紋綾に南天のぬい
利休茶紋綾	振小袖	〔破損につき判読不可能〕 模様太夫妻
御召茶紋縮緬	振小袖	源氏蝶唐草縫入 模様松皮
紅華色紋縮緬	振小袖	菫腰鬘斗目
柳茶紋縮緬	振小袖	■わくに縫入 蘭の模様
生■紋縮緬	告小袖	曙染萩の模様
丁子茶紋縮緬	告小袖	滝に□の模様
鉄鼠羽二重	振小袖	正羽形腰鬘斗目
仙斉納戸羽二重	振小袖	芭蕉織縫模様
塩瀬籠門	振小袖	菊の墨画模様
大内鼠蟬織	告小袖	唐草に風鳥の模様
薩摩鼠蟬織	告小袖	枯木に鳥の縫入模様
當世茶羽二重	振小袖	空形に八重梅うち出し模様
□縮緬	振小袖	牡丹唐草友染模様
御召仙斉縮緬	振小袖	津和の□□縫入模様
煤草茶縮緬	振小袖	しゅろう□模様
鉄生■縮緬	振小袖	大名竹の模様
生■縮緬	振小袖	霞にこうりんの松模様
栗皮茶縮緬	振小袖	菊の模様
黒縮緬	告小袖	金泥入遠山に蝶の模様
小紋縮緬	告小袖	菊の打出し模様
御納戸縮緬	振小袖	板ノ
小紋縮緬	振小袖	翠簾小紋染方模様
緋縮緬	告小袖	浅黄縹子 山道取
関東織嶋縮緬	振小袖	
嶋縮緬	振小袖	
南部嶋	告小袖	紫統の裏
黒媚茶奉書紬	振小袖	葉牡丹の模様
濃生■奉書紬	振小袖	桐懸模様
御納戸紬	振小袖	雲に雀の模様
紬嶋	振小袖	
郡山染紬	告小袖	黒裏
小紋紬	告小袖	
葉板ノ縮緬	告小袖	くふり八掛
仙斉板ノ縮緬	告小袖	くふり八掛
黒竜門	告小袖	茶皮染吹寄模様

裕之部

白縹子	振裕	
御納戸斜子	振裕	津くね土織縫模様
藍海松茶誠縮緬	振裕	大内桐模様
紺天鷲絨蟬織	振裕	金泥入□の葉模様
黒縮緬	振裕	錦木の模様
田土色縮緬	振裕	刷索の模様
嶋染小紋縮緬	振裕	雪持笹に向ふむめ松皮染方
鳥縮緬	振裕	
嶋染羽二重	告裕	枝栗の模様
利休鼠奉書紬	振裕	群雀の模様
煤草茶紬	振裕	松葉摺
紬嶋	振裕	
筑羽根染紬	告裕	竹摺

単物之部

誠羽二重	振単物	結懸の縫入模様
藍藤蟬織	振単物	芦に鴈の模様
薄鼠縮緬	振単物	木蓮花の模様
鳩羽色縮緬	告単物	唐扇友仙模様
緋縮緬	振単物	
御納戸紗綾	振単物	朝鮮躑躅の模様
小紋縮緬	振単物	源氏蝶模様
嶋縮緬	振単物	
薩摩鼠奉書紬	告単物	水に芦間の蟹の模様
濃鼠紬	振単物	竹霞に蝙蝠の模様
煤竹茶紬	告単物	
紬嶋	振単物	
紬嶋	告単物	

夏物之部

柳茶紋紵	振羅	観世水腰 熨斗目
桔梗紵	振羅	源氏貝友仙模様
濃竹柳紵	振羅	水に川□の模様
黒 紵	振羅	唐藍水の模様
路老茶紵	振羅	唐山模様
鳩羽色紵	振羅	茶の花模様
緋 紵	振羅	
白 紵	振羅	
緋 紵	振羅	裾山道
田土色紵	振羅	水に野菊の模様
黒 紵	振羅	金泥の霞
鉄生■紵	振羅	薄に雀の模様
小紋紵	振羅	
小紋紵	告羅	茶器の模様
絹上布	振羅	
濃単越後	帷子	ハツ手花模様
桔梗越後	告羅	茶釜松模様
田土色越後	振羅	姫桐の模様
花色 越後	振羅	
紺 越後	振羅	
生■ 越後	振羅	
生■越後	振羅	水に鮎の模様
越後嶋	振羅	
花色 越後	振羅	しま
桔梗越後	告羅	
小紋越後	告羅	
越後嶋	告羅	
越後嶋	告羅	
紺 上布	振羅	

縹紵之部

緋紋縮緬	袷長縹紵
緋縮緬	袷縹紵
緋縮緬	袷縹紵
緋縮緬	袷縹紵
染分鹿子	袷縹紵
紗羅紗	袷縹紵
緋縮緬	単縹紵
緋 紵	単縹紵
紅 晒	単縹紵
紅木綿肌縹紵	2 ツ
緋 縹紵	1 ツ
木綿縹紵	5 ツ
晒木綿汗取	2 ツ
継之胴着	1 ツ
染方袖なし胴着	1 ツ
くふり八掛 長胴着	1 ツ
継之蝙蝠	2 ツ
筑羽根弁摺合羽	
金巾小紋浴衣	1 ツ
金巾湯鋪	1 ツ
金巾浴衣	1 ツ
手拭	2 筋
木綿小紋前だれ	2 ツ
晒前□□ (たれカ)	1 ツ
緋縮緬裾除 菊のぬい	1 ツ
孤紋裾除	1 ツ
緋紋縮緬裾除	2 ツ
白緒裾除 薄のぬい	1 ツ
緋縮緬 ゆまき	4 ツ
紅木綿下ゆまき	2 ツ
木綿ゆまき	6 ツ
純足袋	4 足
木綿足袋	5 足
紋羽足袋	2 足

帯の部

紺地小金襷	帯
華色輪天鷲絨 金糸丸廻之縫	帯
捍金織物	帯
御納戸織物	帯
白茶織物	帯
黒紋天鷲絨	帯
仙斉茶織物	帯
時代茶織物	帯
白茶廣東織	帯
仙斉茶廣東織	帯
黒羽二重緞子	帯
黒唐緞子 友糸鳥の縫	帯
黒緞子 白より糸梅縫	帯
仙斉茶織物	帯
煤竹茶織物	帯
白緞子	帯
煤竹織物	帯
仙斉織物	帯
仙斉糸錦	帯
竹柳茶紵 轡の模様	帯
紫板メ	帯
緋紋縮緬	腰帯
塩瀬竜門 染方唐草模様	腰帯
紫紋綾 糸桜縫入模様	腰帯
緋紋縮緬	腰帯

常着之部

青梅嶋	きぬ裏	告綿入
青梅嶋	きぬ裏	告綿入
青梅嶋	引きかえし	告綿入
青梅嶋	引きかえし	告綿入
青梅嶋	木綿裏	告綿入
糸入しま		告綿入
金巾小紋		告綿入
青梅嶋	きぬ裏	振裕
青梅嶋	引かえし	告裕
金巾嶋染	引かえし	告裕
糸入しま	木綿裏	告裕
金巾小紋	木綿裏	告裕
青梅嶋		振単物
青梅嶋		告単物
金巾嶋染		振単物
金巾小紋		告単物

帛之部

花色縹子	竹に群雀の縫 裏緋紋縮緬	帛 1 ツ
浅黄縹子	舞扇に狸頭のぬい 裏緋紋縮緬	帛 1 ツ
唐織錦	緋縮緬裏	帛 1 ツ
紅梅染塩瀬	桃の熨斗目染込模様	帛 1 ツ
緋塩瀬	扇に老松の熨斗目縫い	帛 1 ツ
緋紋縮緬	金糸唐草に三ツもり八重桔梗の縫い	帛 1 ツ
唐更紗	緋塩瀬裏	帛 1 ツ
緋紋縮緬		帛もとへ 1 ツ
生■縮緬	小袖包 八重桔梗紋付	1 ツ
かいき嶋風呂敷		1 ツ
茶袖二幅	松竹梅染入	1 ツ
藍天鷲絨木綿	唐草三ツ四幅 八重桔梗紋付	1 ツ
藍天鷲絨木綿三巾		2 ツ
藍天鷲絨木綿二巾		2 ツ

夜具之部

博田織夜着	1 ツ
博田織蒲団	1 ツ
博田織枕	2 ツ
嶋緞子蒲団	1 ツ
嶋緞子座蒲団	1 ツ
嶋天鷲絨駕蒲団 緋紋縮緬裏	1 ツ
緋縮緬縁蚊張	1 張
緋縮緬縁莞蔴	2 枚
塗枕	2 ツ
藍天鷲絨木綿夜着 唐草三ツもり八重桔梗紋付	1 ツ
藍天鷲絨木綿蒲団	1 ツ
藍天鷲絨木綿枕	2 ツ
上代染蒲団	1 ツ
上代染座蒲団	3 ツ
木綿更紗縁蚊張	1 ツ
木綿更紗縁莞蔴	2 枚

〔その他〕

櫛 箱	1 ツ	火のし	1 ツ
鼈甲櫛	1 枚	乾山焼手焙	1 ツ
鼈甲筭	2 本	火のし小手	2 丁
鼈甲簪	4 本	塗盥	1 ツ
金させ両指	1 本	湯桶	1 ツ
金させ簪	1 本	手拭被	1 ツ
銀すかい簪	3 本	木地手桶	1 ツ
銀すかい両指	1 本	銅盥	1 ツ
象牙櫛	1 枚	髪結莞蔴	1 枚
木櫛	1 枚	手燭	1 ツ
帽子針	2 本	塗骨柳	1 ツ
根巻	1 ツ	藤こうり	1 ツ
鏡	2 面	三味線	1 挺
小鏡	1 面	双六盤 并ニ石囊	1 ツ
鏡立	1 ツ	御所囊	1 ツ
椽	1 ツ	鏡囊	2 ツ
長箱 小道具一式	1 ツ	女大學	1 冊
湯かい茶碗	1 ツ	百人一首	1 冊
煙草盆 きせる 2 本	1 ツ	糸のしらへ	2 冊入 1 箱
料紙文庫	1 ツ	雨傘	2 本
硯 箱	1 ツ	日傘	2 本
又 箱	1 ツ	箱灯提	2 張
又箱 小	1 ツ	鉄衣囊	1 対
乱 箱	1 ツ	糠 箱	1 ツ
高槻菓子盆	1 ツ	下駄箱	高下駄 1 足
高槻小菓子盆	1 ツ		中下駄 1 足
張 箱	1 ツ		中切下駄 1 足
針 指	1 ツ		箆嶋下駄 1 足
懸臺	1 ツ		草履 2 足

以上263点

で持たせている。二百六十三点にも及ぶおていの嫁入道具は、里方神崎屋平九郎家の成長と発展ぶりをあらわすものと考えてよいだろう。同時にそれは、嫁ぎ先富田屋に対して神崎屋の財力を主張するものであり、娘が嫁ぎ先で肩身の狭い思いをすることのないように配慮されているのである。

⑤嫁入

無事に結納を済ませてから約一ヶ月後、荷物を運び終えて約一週間後の文政十年四月十六日、おていはいよいよ富田屋久兵衛へ嫁ぐこととなった。

仲人河内屋彦兵衛が先導するように、三本入扇子箱を台に乗せて、父四代目平九郎、母す賀と千枝（四代目平九郎と先妻いとの息子重蔵の後妻）が持参する。親類惣代の薩摩屋伊兵衛と出店の神崎屋彦兵衛も同様に三本入扇子箱台付を土産として持参した。四代目平九郎と出店彦兵衛にはそれぞれ供として本家下人徳蔵と本家丁稚虎蔵が付けられた。さらに、「是日御橋渡し被下二付」として松野屋御家も同行した。この婚礼で松野屋は「縁談口入」として神崎屋と富田屋の婚礼に一役買っていたようである。嫁の挟箱持でも、松野屋下人二人と薩摩屋伊兵衛下人一人がつとめている。

嫁入りはおそらく夜に行われたものと思われ、提灯持ちには、別家の亀松と神崎屋本家の丁稚虎蔵が、箱提灯は本家下人和助がそれぞれつとめている。宰領として運送の管理には、別家神崎屋両蔵があたり、駕持ちは、神崎屋本家の手代嘉助がつとめている。内挟箱持には、別家神崎屋次兵衛の亀蔵が充てられている。

さらに、富田屋から迎えに来た人数は、羽織を着た手代一人、女中、下男、仲人供ほか計六名であった。

おていは、富田屋に入った後、土産物として舅である富田屋の御隠居へ真綿百目（代二十五匁位）、姑にあたる御母上へ濱縮緬（代百五匁）、夫久兵衛へ杉原十帖（代十六匁）をそれぞれ渡している。姑への土産物が一番高価であり、嫁ぎ先へ入った後に一番付き合ひの深くなる姑への気遣いがかがわれる。

さらに、富田屋久兵衛の別家富田屋藤助、同内室おきく、同子息藤二郎へそれぞれ南（簾）一片、銀一両、南（簾）一片を、嫁おせいとその子おはるには、銀一と銀三をそれぞれ遣わしている。

つづいて、富田屋出入方の多田屋文蔵、加島屋安兵衛、山田屋新助へ南（簾）一片を、吉野屋伊助、山田屋元七、播磨屋與兵衛、河内屋清助、三田屋林平に銀一両をそれぞれ渡している。出入方の女衆、おちか、おゆき、おますにはそれぞれ銀一両が渡され、今後の付き合ひの挨拶をしている。金額の記載はないが、下人藤兵衛・源六・安兵衛・佐助・おさわ・おさし・おわきの七人や料理人たちにも祝儀が遣わされていると思われる。おていは、富田屋久兵衛の妻としてやがては下人や下女に指示を与えることになるので、下人や下女への心遣いは大きなことであった。

さらに、富田屋が居を構える町の町代吉次郎と、同母へ銀一両と銀三匁を、下役五兵衛・同善七へ三匁、髪結伊八・同利助へ銀三匁がそれぞれおていから遣わされており、嫁ぎ先の地域社会の一員としてみなされるための挨拶の儀礼であることが分かる。

翌十七日の朝には「部屋見舞」として、富田屋の親類筋が別家にあたると思われる女性、お駒とおねへ南簾一片・膳料銀一両、折熨斗付きの虎屋饅頭二〇〇を遣わしている。おていが彼女たちへ挨拶に行くときは、実家神崎屋の下人徳蔵と弥助が付き添っている。さらに、実家神崎屋の手代田七も、おていのために折熨斗付きの鉄明衣囊を持参して「部屋見舞」へ参加している。「部屋見舞」は、嫁ぎ先の親戚筋の女性への挨拶であり、新しく嫁いだ者にとっては里方の付き添いが存在することは心強かったであろうし、里方は、店の者を遣わせることによって、嫁ぎ先の様子を知ることができたものと思われる。

⑥花帰り

おていは、富田屋へ嫁いだ十二日後の四月二十八日夜、「花帰り」と称する里帰りをした。おていの里帰りには、里方の別家神崎屋定七とその女房お庄（正）、里方の下人和助ほか一人の計四人が迎えに行っている。別家の衣裳は羽織袴の礼装である。

里帰りの際には、おていから里方神崎屋平九郎家を除く家内の者計二十八人へ土産物が渡された。里方神崎屋平九郎家へは鯉節拾本入一箱、別家衆五人へはそれぞれ銀一両が渡され、別家衆の女房五人、別家衆子供五人、手代三人、下人三人、下女四人、丁稚三人へは銀三匁がそれぞれ渡されているのが確認できる。同時に「部屋見舞」が行われ、別家女中へも銀一両、ふじ饅頭、虎屋饅頭二〇〇を遣わしている。この贈答儀礼は、嫁入りが無事終了し、おていが富田屋の家内になったことを身内の者、つまり別家衆と里方の店の者たちに認識させる役割を果たしていたものと考えられる。

二日後の四月晦日夜におよび、おていは再び富田屋へ戻ることとなった。この時も袴羽織の礼装をした里方の別家神崎屋次兵衛とその女房お豊が、おていを富田屋まで送る役目を果たし、提灯持ちには手代田七と下人徳蔵がつとめている。

富田屋へ戻ったおていは、舅の御隠居殿へ箱入小倉十を、御内へは箱入鯉節十を土産物として贈った。別家衆富田屋藤助とその息子藤次郎や他の箇所「出入方」として登場する多田屋文蔵、加島屋安兵衛、山田屋新助へ白銀一両、その他手代や下人、下女、丁稚と思われる人たちが十七人へ銀三匁がそれぞれ贈られている。嫁ぎ先富田屋を除くと、計二十二名である。里帰りの際の贈答については、両家には祝いの品、別家へは銀子と決まっているのが特徴である。里帰りによって、おていが土産を贈る人数は、おていの里方神崎屋の方が若干多い。

⑦ 聶入ゝ富田屋久兵衛の神崎屋への挨拶

おていが再び嫁ぎ先の富田屋へ戻って四日後の五月四日、今度は、聶の富田屋久兵衛と母おげんが、雨の中、親類富田屋長兵衛、塩飽屋善兵衛、同子息善五郎・同母、別家子息富田屋藤次郎を伴って、仲人河内屋彦兵衛の引き合わせで神崎屋平九郎家へ挨拶にやって来た。この時、富田屋の御隠居は同行していないようである。

この時には、相伴人として神崎屋平九郎家の親類薩摩屋、同子息、大和屋、長濱屋、灘屋、大嶋屋、分家の神崎屋彦兵衛の計七人も駆けつけてお

り、富田屋久兵衛から親類衆に対して小杉三束、三本入扇子箱が贈られている。

聶富田屋久兵衛から、おていの父四代目平九郎へは箱入扇子三十、母おす賀へは白龍門一反、御隠居（三代目平九郎）へは氷砂糖三枚、四代目平九郎の妹お時、四代目平九郎と先妻いとの子十蔵へは扇子三本入、十蔵の後妻お千枝へは小杉五束、十蔵とお千枝の子お駒へは鈴かけ一つがそれぞれ贈られている。

さらに、別家衆五人へは南鐐一片、別家衆女房五人へは白銀一両、それぞれの身内五人へは白銀三匁が遣わされている。また、出入方の女性五人や手代三人、下人三人、下女三人、後家二人、丁稚三人、酌人兩人、料理人五人、町内会所正助へは白銀一両が聶久兵衛からそれぞれ遣わされている。町内会所の女房、下役二人、町の者三人へはそれぞれ白銀三匁が遣わされており、これも、聶富田屋平九郎が嫁の里方の親類・縁者や地域社会に対して親類の仲間入りをすることを周知してもらうための挨拶の儀礼であったと考えられる。聶入の献立料理を同席で食べることによって、その意味はさらに強まった。

おていが富田屋へ嫁いだ際、富田屋御隠居と母、夫久兵衛への最初の土産物は贈答の品であったように、聶の富田屋から嫁の里方神崎屋平九郎家の家族には同じように贈答の品が遣わされていること、別家衆や出入方、親類衆には銀が遣われていることが両家に共通してみられる特徴である。

五月十日には、「弘めのむしもの」として親類・縁者へ赤飯が遣わされている。これも、めでたいことを分かち合い、互いの結束をかためる「共食」を意味していたと思われる。

⑧ 仲人・縁談口次への礼

結納から約二ヶ月後に、神崎屋のおていと富田屋久兵衛の婚礼はほぼ終了した。神崎屋と富田屋は、まず、この間ずっと世話になった仲人河内屋彦兵衛へ金一二〇〇疋、同御内室へ金五〇〇疋、御肴・御酒料として金三〇〇疋の計二〇〇〇疋（代金五両）を両家で割って遣わすことになった。二つに割ると一軒につき二両式歩ずつになり、「軽少之様子二相聞へ

申候故菓子料として両家方金三兩追礼致・・・」と記されているように両家でさらに礼金を増やして河内屋彦兵衛と女房へ遣わしている。

また、この縁談の口次をした岡屋金助へ大織紬一反(代二十九匁)、天野屋酒印紙五枚(代八匁四分)が遣わされており、これも両家で分担している。縁談口次は仲人に比べるとかなり安い報酬である。同じく、縁談口次の礼として薩摩屋喜兵衛へは、鯛一枚、鰻一本(代八匁四分)、名酒切手三枚(十四匁四分)、まつのや御家様へは奉書紬一反(五十一匁)が贈られ、これらはいずれも神崎屋平九郎家一軒で礼を行っていることが注目され、神崎屋の縁者であると思われる。

⑨ 婚礼献立

最後に、婚礼時の献立について紹介しよう。ここでは、料理が詳細に記録されている五代目神崎屋平九郎(養子)とお吟の婚礼献立を取り上げる。

まず初めには、床飾付などを揃え、夫婦と親類が無言で盃をかわし、式三献が行われている。次に、「後献立」「御膳」が続き、様々な料理が出され、婚礼に参加する人たちに振舞われている。献立は以下の通りである。

献立

床飾付 三宝のし 羽盛(木具) 舟もり(同) 相生のし(三宝)

土器(同) 右夫婦盃 無言 又親類盃 同 但し冷酒

是より間酒

小角 田作り 一雑煮(のしもち・くし貝・大根・小芋・平かつを)

小角 勝栗 昆布

初献 引盃

一小皿引 樽塩 まつ葉

二献

一吸物 鮎式枚もり 干さんしよ

三献

後献立

一硯蓋(大紅板・川茸・松風玉子・吹寄せより・ちよろき) 一鉢(子持はせ・竹の子・焚■) 一吸物(鶉たたき・もやし) 一大鉢(鯛濱焼) 一中鉢(すぐき・割くわん■・わさび醤油・なんば酢) 一吸物(松露・木くらけ・さや豆・あん平とうふ) 一鉢(玉子白身・ゆりね・きうり梅肉あへ) 一大平(うなぎ・ゆりね・玉子■)・

一吸物(むすびきすこ) 一鉢(あちやら) 一大鉢(魴栗むし) 一吸物(生こち・赤みそ仕立・たかの爪) 一ひやし物(てつせん・かつら・作り物)

御膳

鱈(熊笹■)・さより・金糸玉子・めじそ・岩茸・割くわん■) 香のもの

汁(煮ぼし・ふき) 平(車えび・あぶきしんじょ・竹の子) 菓子碗(油め・水せんじ・なめ茸) 焼物 預かり

初献 臺引(焼とり・花昆布)

無言

吸物(蛤)

※くし貝(串に刺して干した鮑)、勝栗(干して白で搗き、外皮・渋皮を取去った栗の実。「勝ち」に通じるので祝い事に使われる)、松風玉子(卵を割込み、よくといて生姜の絞り汁と饅頭の粉を入れ、砂糖と酒を加え、布でしぼってこし、焼いたもの。表面にけし粒をふりかける)、ちよろき(草石蚕。晩秋から冬に収穫し、味が甘いので「甘露子」と名づけられた。シソ科の多年草で塊茎を食用とする。献立名に「長老木」などと書いて縁起をかつぐ)、生こち(ふぐもどき。こちは、水洗いを丁寧にし、頭を落とし、背びれを取り三枚におろす。小骨を取って皮を引く。小口から薄切りにし、頬肉、胸ひれの肉も入れてよい。塩漬けのナ

スを薄く切り、塩出しをしてあしらいにする。赤味噌仕立てにし、薬味はねぎ小口切り、唐辛子などで出す、水せんじ（水前寺海苔。熊本産。近世では高級品）臺引（膳に添えて出す肴や菓子のこと。島台、広蓋などにならべておき、台からとって客にすすめ、また客に持ち帰らせるもの）（『日本料理秘伝集成』同朋社、一九八五年を参照）

これらは、「神武二而料理致、魚ハ此方相調青物神武二而調 料理人式人 金式朱宛ニ祝儀」と記されているように、「神武」が料理をし、青物を調え、魚は魚問屋である神崎屋平九郎家で用意していることが分かる。「神武」は、『鷺池家文書』のうち「天保五年二月吉日式番年忌葬式覚」の法要献立の記録の中で「八百屋神武」とあるので、八百屋である可能性が高い。近世大坂の商家では、日常の食事は家内でまかなうが、ハレの食事は専門家に任せるやり方が一般的であったらしく、特に法要の料理は、もともと八百屋であったと思われる店が引受け、それが次第に仕出屋に発展したと考えられている¹⁶。

二、まづめ

以上、雑喉場魚問屋神崎屋平九郎娘おていと富田屋久兵衛の婚礼についてみてきたが、以下検討したことをまとめておく。

①商家の婚礼の特徴

近世大坂商家の婚礼は、おていの出立前の祝儀銀や到来物、嫁入りの土産や部屋見舞、花帰りの土産、また贅入の土産などの贈答をみると、両家はもちろんのこと、重視されていたのは、分家、別家、親類衆、出入方、店の手代、下人、下女、丁稚などの身内であった。それは、嫁の荷物運搬の手足ですら身内関係者がつとめていることから明らかである。一連の儀礼が親類・縁者によって執り行われていることから閉鎖的な印象を受けるが、同時にそれは、商家同族団の結び付きの強さを示していると捉

えることができる。

また、女性からみて姑となる嫁ぎ先の母や「部屋見舞」にみられたように、嫁ぎ先の出入方や親類筋の女性との関係は初めから配慮されており、商家の奥を預かる女性同士の関係は円滑にすることは商家経営にとって重要な要素であったと考えられる。そして、嫁自らが指揮をすることになる嫁ぎ先の下人や下女などへの配慮も怠ってはならなかった。これらのことは、おていが進物や銀を彼ら彼女らに贈っていることからよく分かる。さらに、同じ雑喉場の商家や町内会所、縁のある寺からも祝儀や到来物があり、この贈答によって互いに地域の一員であることを再確認していたと思われる。また、両家は、贅は嫁の、嫁は贅の町内会所へ祝儀銀を遣わしているが、これは、それぞれの地域社会の一員として認識してもらうための贈答儀礼であったと位置づけることができる。

乾宏巳氏は、化政・天保期の大坂の都市的發展の停滞を、商人らの新陳代謝の活力を弱めて住民の地域への定着性を高め、さらに繁栄の維持や既得の商圈の確保のため地域との結合を強めていくものと考え、このような地域における結合は、地縁的結合のうえに同族的な結合も加わって地域共同体を構成していくと指摘している¹⁷。今後、婚礼のような商家の儀礼が幕末期大坂という都市のなかで、どのような役割を担い、どのように捉えられていたのかを明らかにする必要があるだろう。

また、おていの婚礼の祝いの品は実用的な品が多いのが特徴であった。なかには、法要の際に多く贈られている印紙・切手もみられ、商品流通が発展し、商品需要の多い近世大坂ならではの都市的な贈答の形態であることが分かった。

婚礼など商家の儀礼には、行列に使用する提灯、看板が必要となるが、このような貸出し業を営む者が町内や地域に存在し、彼らの渡世は、婚礼や法要などの商家の儀礼によって成り立っていたと考えられる。

②雑喉場魚問屋としての成長と婚礼

前述のように、おていの婚礼が行われた文政期は、ちょうど神崎屋平九郎家が雑喉場魚問屋として成長しつつある時期であり、それは二百六十三

点にも及ぶおていの嫁入道具や衣裳の豪華さに反映されていると思われる。この二百六十三点が多いか少ないかについては他の大坂商家の事例も含めて相対的な検討を要するが、本来ならば御殿女中が身につけるような衣裳を小橋屋や大丸、三井越後屋などの大店で誂えていること、仲人への礼金を追加していることなどを考慮すると四代目神崎屋平九郎の間屋経営は多少の問題はあるにせよ、順調なものであったと考えることができるのではないだろうか。

神崎屋では文政十年に「諸祝儀申合定」の規定を設けており、「一、婚禮之節祝儀南鐐一片并二嫁へ遣ス祝儀金百疋」「一、嫁入之節祝儀金百疋」など各祝儀・不祝儀の金額規定の項目の前に「一、平日折見舞之節老人小児二至迄手土産等聊之品ニても持参致間敷事」「一、客来之節時分ニ相成候共茶漬一菜ニ而出し可申事」「一、酒を出し候節者豆腐計ニ而差出し可申事」との儉約規定があり、日常的には地域の人たちとは慎ましい交際をするように戒めている。また、明治七年（一八七四）の「贈物帳」の記載からは「近年競テ高価ノ物品ヲ贈ル」（こと）トナレリ・・依テ今更ニ此約定ヲ設クルモノナリ」とあり、親族の贈物過剰傾向をとどめようとしている様子が分かる。¹⁸このような記載から、神崎屋平九郎は、平素は質素儉約を重んじた商家経営に努めており、商家としての資金の使い方を熟慮し、婚礼などのハレの日と日常の区別を行っていたものと考えられる。

注

- (1) 『鷺池家文書』の資料集は、大阪市史編纂所編・大阪市史史料第四十輯『諸国客方控』『諸国客方帳』が刊行されており、近世後期における神崎屋の集荷先荷主の国名・浦・取引の生魚類が詳しく分かる。酒井亮介「大阪雑喉場魚市場の取引形態史―『諸国客方帳』の研究―」『漁業経済論集』第三十三号（西日本漁業経済学会、一九九二年）、「大坂雑喉場魚市場の取引形態史（その2）―『諸国客方控』の研究―」同第三十四巻、一九九三年）さらに『大阪雑喉場魚問屋史料』（三二書房、一九九七年）にも近代を中心として資料室保存の資料の一部が紹介されている。

- (2) 近江晴子校訂『助松屋文書 大阪・鞆干鰯商の記録』（一九七八年）

- (3) 『近世商家の儀礼と贈答―京都岡田家の不祝儀・祝儀文書の検討―』（岩田書院、二〇〇一年）

- (4) 『新修大阪市史』第四巻

- (5) 近江晴子「さくばと天神さん」（季刊大阪「食」文化専門誌『浮瀬』No.3 浪速魚業を守る会、二〇〇三年）

- (6) 原田政美「鷺池家史料目録と解説」（『市場資料室ニュース』第四号 大阪市中央卸売市場本場（社）中央倶楽部、一九八八年）を参照

- (7) 瀬尾竹雄『京阪神市場人物誌』（中央市場新聞社、一九三二年）によれば「・・・神平商店主鷺池平九郎氏は斬然として異彩を放ち其の富実に数千万円と称せられ、多額納税者中の白眉たり、而して其の取引高の如きも断然同業をリードし啻かに雑喉場市場に於て首位を占むるのみならず、全日本の同業者中に於ても常に第一位にありて、遙かに他を凌駕し居れり。鷺池家は雑喉場に於ける由緒深き老舗にして、其の家系は連綿として数百年の長きに亘る。」とある。

- (8) 林玲子氏は、女性の身近にいた男性の記録を分析することにより、一八世紀京都の木綿問屋柏屋四代目光忠の妻りよが、同家発展の過程において店と家の両者結び、繁栄に努力したことや近江国神崎郡中村の在方商人の妻梅原みきの生活などを明らかにしている。（『江戸・上方の本店と町家女性』吉川弘文館、二〇〇一年）また、藪田貫氏は、河内古市郡古市村の「西谷サク日記」の分析から、在方商業という要素が西谷家に女性の教育を身に付けさせ、同時に家政処理能力や文筆能力を高め、その結果、西谷家の「女文字の世界」が塊として残り、その反面で「村政」への距離が開いたことを指摘している。（『女性と地域社会―河内古市郡古市村「西谷サク日記」を素材に―』藪田貫・奥村弘編『近世地域史フォーラム2 地域史の視点』吉川弘文館、二〇〇六年）

- (9) 銀一両とは、銀四匁三分のこと、銭に換算するとおよそ三〇〇文である。（井原西鶴「万の文反古 第二の一 縁付まへの娘自慢」『新日本古典文学大系 七七』岩波書店、一九八九年）注釈参照。

- (10) 森田氏前掲書参照。

- (11) 「明治五年正月吉日 貸家賃扣帳」『鷺池家文書』

- (12) 「資料大阪水産物流通史」（三二書房、一九七一年）

- (13) 「大坂は高麗橋通り三丁目虎屋大和太掾藤原伊織なる者、諸国に名ありてすこぶる巨店なり。饅頭、出島白さたう制一つ価五銭なり。虎屋饅頭と称し、大坂も諸所にこの店ありといへども、虎屋制にあらざれば客に饗しあるひは贈物等には、他制を用ふることを恥するなり。」（『近世風俗志』五 岩波書店、二〇〇二年）とあり、虎屋饅頭は客人の饗応や贈答に用いられていた。

- (14) 近世大坂の葬具業者は十八世紀初頭には「乗物屋中」という仲間を結成してい

たという。(木下光生「近世葬具業者の基礎的研究」『大阪の歴史』五十七、二〇〇一年)

(15) 『近世風俗志』三(岩波書店、一九九九年)

(16) 近江晴子「軒をつらねる食の専門店、多彩な料理屋」(『人づくり風土記大阪の歴史力』農山漁村文化協会、二〇〇〇年)

(17) 乾宏巳『近世大坂の家・町・住民』(清文堂出版、二〇〇二年)

(18) 『市場資料室ニュース』第四巻参照

〔付記〕

本稿は、平成十九年度なにわ・大阪文化遺産学研究センター第一回生活文化遺産研究例会における報告をもとに執筆したものです。報告の当日は研究員酒井亮介氏と近江晴子氏に貴重なコメントをいただき、また、来場者の方からも様々なご意見を賜りました。末筆ながら、感謝の意を申し上げます。